

関西言語学会第48回大会 2023年6月10日

日本語における2種類の分離動詞の違い

— 分離元と分離物の関係および構文的意味について —

王 鈺 (オウ ギョク)

大阪大学人文学研究科 博士後期課程

目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 調査方法
4. 分離元と分離物の関係
5. 構文的意味
6. まとめ



1. はじめに

分離動詞と分離事象

定義：あるものX（分離元）からあるものY（分離物）を分離させる出来事

- (1) a. ボトルから栓を抜くというより栓からボトルを外すという感じで...
b. ...装飾用スクレーパーを使って木材から塗料をはがす。
- (2) a. 森から木を切った後に、大きな窯に入れて数週間掛けて乾燥させます。
b. 手帳から紙をちぎる。/花から花びらをちぎる。

(BCCWJ)

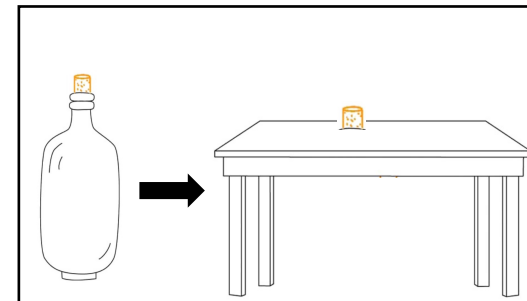
(BCCWJ)

(Web実例)

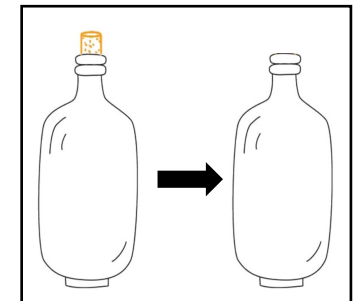
(岩崎 1981)

フレーム：YをXからZ（非言語化）に移動させるのに
伴い、Xに状態変化をもたらす。

- ◆ 下位事象1：YのZへの移動 分離物の位置変化
- ◆ 下位事象2：Xの状態が変わる 分離元の状態変化



下位事象1



下位事象2

- (3) a. (*部屋から)花瓶を破る。
b. (*卵から)殻を割る。

→完全破壊型動詞（典型的な状態変化動詞）

2. 先行研究

- 相補分布説 (Jackendoff 1983, 1990)

- (4) a. The bird went from the ground to the tree. $[\text{Event GO}_{\text{Spat}}([\text{Thing}], [\text{Path}])]$
b. The light went from green to red. $[\text{Event GO}_{\text{Ident}}([\text{Thing}], [\text{Path}])]$

➤ 状態変化=抽象的位置変化 (平行した意味構造を持ち、translational motion をモデルとする)

- 事象共存説 (岩田 2010)

- (5) a. He spread the butter {thin/thick}.
b. He spread the butter on the bread.
c. He spread the butter {thin/thick} on the bread.

➤ 状態変化と位置変化が共起し、相補分布の関係に当たらない (translational motion をモデルとしない)

2. 先行研究

日本語における使役移動動詞の種類（伊東 2015:96-97）

◆ 移動の 方向性 を含む動詞	上げる、下げる、落とす、降ろす、入れる、出す、置く、載せる、集める、広める、回す、逃がすなど
◆ 移動の 手段 を含む動詞	投げる、打つ、送る、運ぶ、押す、引く、届けるなど
◆ 移動の 様態 を含む動詞	流す、浮かべる、飛ばす、転がすなど
◆ 移動に 変化 を伴う動詞	塗る、空ける、片付ける、包む、注ぐ、満たす、埋める、など (典型的なものは、場所格交替を起こす動詞)

2. 先行研究

◆ 典型的な移動に変化を伴う動詞（場所格交替を起こす動詞）（奥津 1981, 岸本 2001, 川野2021）

(6) a. 太郎は 壁に ペンキを 塗る。 (位置変化)

<着点> <対象目的語>

b. 太郎は 壁を ペンキで 塗る。 (状態変化)

<場所目的語> <構成物>

(7) a. 太郎は グラスから 水を 空ける。 (位置変化)

<着点> <対象目的語>

b. 太郎は グラスを 空ける。 (状態変化)

<場所目的語>

◆ 非典型的な移動に変化を含む動詞（場所格交替を起こさない動詞）

(8) a. 太郎は ボトルから 栓を 抜く。 (位置変化)

<着点> <対象>

b. *太郎は ボトル を 抜く。 (状態変化欠落)

<場所目的語>

2. 先行研究

◆ 離脱動詞 (李 2016, 2019)

- (9) a. 台風が海にぬけた。 (位置変件事象)
b. 瓶の栓がぬけた。 (分離事象)

◆ 分断・破壊動詞 (栗田 2018, 洪 2020, 王 2021)

- (10) a. 野菜を切る。 (状態変件事象)
b. 野菜の水気を切る。 (分離事象)

	位置変件事象	状態変件事象	位置変化と状態変化を同時に含む分離事象
離脱動詞	○		○
分断・破壊動詞		○	○

表1 先行研究における2つの動詞群の表す事象類型

➤ この2種類の動詞は同様に分離事象を表す際に、どのような違いがあるかは明らかにされていない。

2. 先行研究

本研究は、先行研究で別々に扱われていた離脱動詞および分断・破壊動詞を分離動詞という1つのカテゴリーに統合して考える。そして、分離動詞を①位置変化型分離動詞と②状態変化型分離動詞という2種類に分類する。

本発表では、特に「抜く」(位置変化型)と「切る」(状態変化型)を中心に取り上げ、以下の2つの研究課題に取り組む。

課題

- 2種類 of 分離動詞には、どのような違いが見られるか。
- ◆ 分離元と分離物の関係に関して、違いがあるか。
- ◆ 構文的意味に関して、違いがあるか。

3. 調査方法

コーパス調査とデータ収集

- NLB (NINJAL-LWP for BCCWJ) を用いてデータを収集する。
- フラ格名詞 (分離物Y) のパターンを考察する。
- XからYをV / XのYをVという分離事象の構文に当たるYを頻度順に抽出する。
 - Xが言語化されていなくても、論理的にXを想定できると判断できれば、この構文に当たるものと扱う。
 - 位置変化のみを含意するタイプと、状態変化のみを含意するタイプを除く。

	[NをV] コロケーションの種類数	分離事象に当たる[NをV] コロケーションの種類数
抜く	611	112
切る	1040	67

表2 分析対象となるデータ

4. 分離元と分離物の関係

位置変化型分離動詞		状態変化型分離動詞			
「Y(を抜く)」	関係	「Y(を切る)」	関係		
刀	122	②	髪	134	③
剣	89	②	水気	124	①
空気	65	②	水	68	①
栓	55	①	封	58	③
歯	33	③	爪	56	③
毛	28	③	枝	40	③
針	26	①	切符	30	③
アク	20	①	茎	23	③
水	19	②	根	22	③
プラグ	18	①	髪の毛	20	③

◆ 分離元と分離物の関係パターン

パターン①: 付着・付属 (Xに付いているYをV)

パターン②: 容器-中身 (Xの内部にあるYをV)

パターン③: 全体-部分 (Xの一部であるYをV)

表3 物理的分離事象における分離元と分離物の関係(頻度上位10種類)

4. 分離元と分離物の関係

◆ パターン①: 付着・付属 (Xに付いているYをV)

- (11)
- a. 注射器の中身が空になると、エディは血管から針を抜いた。
 - b. こんにやくは塩少々でもんでアクを抜き、水で洗う。
 - c. 待機電力節約の為、コンセントからプラグを抜くことを推奨。
 - d. 指から指輪を抜く。
- (12)
- a. くわえてから、シャワーを蛇口に切り替え、頭を振って髪の毛の水気を切る。
 - b. 刺身こんにやくは水洗いした後、水気を切る。

4. 分離元と分離物の関係

◆ パターン②: 容器-中身 (Xの内部にあるYをV)

- (13) a. 簡易真空容器の中の空気を抜いて、それぞれの変化を記録する。
b. 製氷機などから水を抜いたり、冷蔵庫の霜を取ったりするのも忘れないようにしましょう。
- (14) a. たまには息を抜いて、思い切り酔っ払いたい。
b. 北森は毒気を抜かれた表情になり、言った。

◆ パターン③: 全体-部分 (Xの一部であるYをV)

- (15) a. 昔の歯医者は、虫歯が進行すると歯を抜きました。
b. 悟空は体の毛を一本抜きますと、それを『ねむり虫』に変えた。
- (16) a. 自宅などの敷地内にある桜の木が病気にかかっていたら、その枝を切り、駆除にご協力ください。
b. 親指の爪をきちっと切って、ヤスリで角を落としてください。

4. 分離元と分離物の関係

一体性変化による解釈

実体の物理的・空間的・形状的なまとまり方に関する変化を「一体性変化」と呼ぶ。一体性変化は変件事象の下位類である。一体性変化が起こると変化主体は元のあり方では存在しなくなる。

井本(2016: 22)

	パターン① 付着・付属	パターン② 容器-中身	パターン3 全体-部分
抜く	50.8%	31.4%	17.8%
切る	3%		97%

➤ 3つの関係パターンでは、**一体性の程度**が違う。

表4 分離元と分離物の各関係パターンの割合

■ 状態変化型分離動詞における典型的な一体性：**本来的一体性**（パターン3が中心である）
XとYは連続体として本来的につながっている状態にある。

■ 位置変化型分離動詞における典型的な一体性：**擬似的一体性**（パターン1と2が中心である）
Yは本来的にXの一部ではなく、何らかの操作のもとでXに付いている。

5. 構文的意味

◆ 事象の性質

位置変化と状態変化を備える両面性

- 位置変化と状態変件事象が一致する場合

(17) a. グラスから水を空ける。

b. グラスを空ける。

<場所目的語>

- 位置変化と状態変件事象が一致しない場合

(18) a. ボトルから栓を抜く。/庭から雑草を抜く。/血管から針を抜く。

b. *ボトルを抜く。/*庭を抜く。/*血管を抜く。

<場所目的語>

➤ *[XをV]:状態変化欠落

(19) a. 木から邪魔な枝を切る。/手帳から紙をちぎる。

b. 木を切る。/手帳をちぎる。

<対象目的語>

➤ [XをV]と[YをV]の事象が一致しない

5. 構文的意味

◆ 統語的振舞い

• カラ句との共起

- (20) a. 製氷機から水を抜く。
b. 壁から汚れを落とす。

- (21) a. 木から邪魔な枝を切る。
b. 花から花びらをちぎる。

• 結果句との共起

- (22) a. 髪を短く切る(ショートヘアにする)。髪を長めに切る(ロングヘアのまま先だけ切る)。
b. *髪を短く抜く。/*髪を長めに抜く。

- (23) a. 金木犀の枝をこざっぱりと切る。
b. *金木犀の枝をこざっぱりと抜く/*落とす。

5. 構文的意味

◆ 焦点化と事象共存のメカニズム

川野(2021)は、場所格句と対象格句の語順には、場所と対象に関する認識の時間差が関与していると指摘した。

	場所	対象
発生動詞	先	後
変化型位置変化動詞 (場所格交替動詞含み)	同時的	
移動型位置変化動詞	後	先

表5 場所と対象に関する認識の時間差(川野 2021: 247 一部変更)

- (24) a. グラスから水を空ける。 ①
 b. 水を空ける。 ①
 c. グラスを空ける。 ②

➤ Xが状態変化しているのと同時に、Yが位置変化している。
 位置変化と状態変化が同時に発生している。

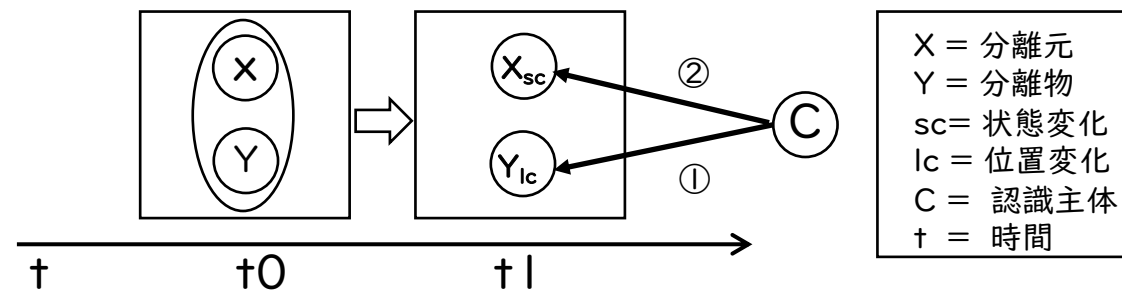


図1 場所格交替動詞における両事象共存のメカニズムと焦点化

5. 構文的意味

◆ 焦点化と事象共存のメカニズム

- (25) a. ボトルから栓を抜く。 ①
 b. 栓を抜く。 ①
 c. *ボトルを抜く。 ② (状態変化焦点化欠落)

➤ Xが状態変化しているのと同時に、Yが位置変化している。
 位置変化と状態変化が同時に発生している。(因果関係)

- (26) a. 木から邪魔な枝を切る。 ③
 b. 枝を切る。 ②
 c. 木を切る。 ①

➤ Xが状態変化した後、Yが位置変化する。
 連続的なスクリプト: 状態変化が先行して、位置変化が起きる。(前後関係)

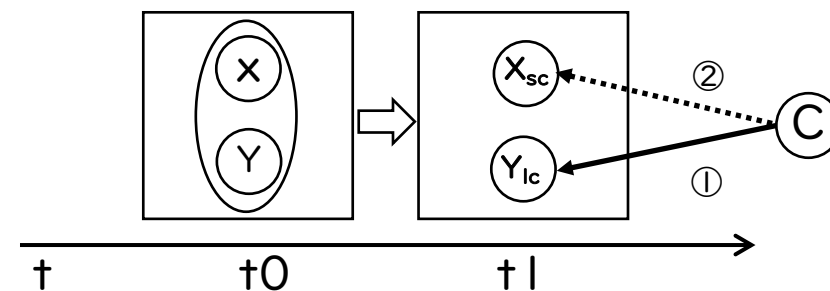


図2 位置変化型における両事象共存のメカニズムと焦点化

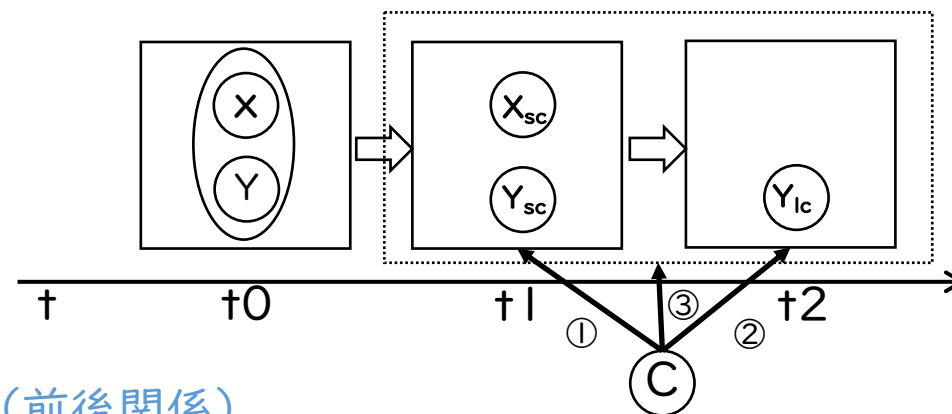


図3 状態変化型における両事象共存のメカニズムと焦点化

5. 構文的意味

◆ 単一経路の制約 (The Unique Path Constraint)

項Xが物理的な事物を指す場合、1つの節の中で、Xについて2つ以上の異なる経路が叙述されてはならない。「単一の経路」の概念は次の2つの場合が規定される。

- (a) Xはある特定の時点tにおいて、2つの異なる場所に移動するような叙述がなされてはならない。
- (b) 移動は単一の情景の中で経路を辿るものでなければならない。

Goldberg (1991: 368)

➤ 同時に異なる種類の経路が叙述されてはいけない。

- (27) a. *Sam kicked Bill black and blue out of the room.
b. *Sam kicked Bill out of the room black and blue. Goldberg (1991)
- (28) a. The cook cracked the eggs into the glass. Levin and Rappaport Hovav (1995)
b. John broke the mirror into the trash can little by little. Yasuhara (2013)
c. John emptied the bottle into the sink. Yasuhara (2013)

5. 構文的意味

◆ 2種類の分離動詞における状態変化と位置変化の類型

川野(2021)は、交替動詞と非交替動詞における位置変化と状態変化事象の類型が異なると指摘した。

動詞種類	動詞	位置変化	状態変化
交替動詞	空ける、片付ける、溢れる	依存的転移	総体変化
位置変化型分離動詞	抜く、落とす、外す	非依存的転移	総体変化
状態変化型分離動詞	切る、ちぎる、折る	非依存的転移	自体変化
完全破壊型動詞	割る、破る、裂く	×	自体変化

表6 状態変化と位置変化の類型の非同一性

● 2種類の状態変化類型による効果が異なる

総体変化：分離物自体の変化ではなく、分離物を移動させることで分離元の総体的な様子が変わる。

➤ 分離動作による付随的な効果 Yの位置変化 ⇔ Xの状態変化

自体変化：分離元と分離物の自体の形状・属性・配置等の変化である。

➤ 分離動作による主効果 XとYの状態変化 → Yの位置変化

5. 構文的意味

◆ 単一経路の制約に反するか？

(29) a. グラスから水を空ける。
意味: Xの状態変化+Yの位置変化

b. ボトルから栓を抜く。
意味: Xの状態変化+Yの位置変化

c. 木から邪魔な枝を切る。
意味: Xの状態変化+Yの状態変化+Yの位置変化

d. 手帳から紙をちぎる。
意味: Xの状態変化+Yの状態変化+Yの位置変化

構文形式: X(分離元) から Y(分離物) ヲ 動詞

(場所格交替動詞)

➤ 位置変化と状態変化の項が一致しないため、制約に反しない。

(位置変化型分離動詞)

(状態変化型分離動詞)

➤ 位置変化と状態変化の項が一致するため、制約に反する。

(状態変化型分離動詞)

➤ 単一経路の制約に違反すると認められる分離事象表現の特徴:

① 空間関係: 分離元と分離物の関係は本来の一体性である。

cf. *野菜から水気を切る。(擬似的一体性)

② 時間関係: 状態変化と位置変化が同時進行ではない。

cf. お母さんから白髪を抜く。(同時進行)

6. まとめ

		場所格交替動詞 （「空ける」「片付ける」「溢れる」）	位置変化型分離動詞 （「抜く」「落とす」「外す」）	状態変化型分離動詞 （「切る」「ちぎる」「折る」）	完全破壊型動詞 （「割る」「破る」「裂く」）
分離元と分離物の関係			擬似的一体性	本来的一体性	本来的一体性
事象の性質	位置変化と状態変化の両面性	○	○	○	×
	位置変化と状態変化事象の同一性	○		×	
統語的振舞い	カラ句との共起	○	○	○	×
	結果句との共起	○	×	○	○
焦点化	位置変化焦点化	○	○	○	×
	状態変化焦点化	○	×	○	○
単一経路の制約に反するか		×	×	○	×

表7 2種類の分離動詞と関連する他動詞群の比較

今後の課題

◆ 仮説の精緻化

他の分離動詞の意味や統語的振る舞いを精査・分析し、意味的特性と構文的特徴の関連性を明確にしておき、位置変化型と状態変化型という2種類の分離動詞の仮説を精緻化する。

◆ 単一経路の制約に反する表現の成立の要因

状態変化型分離動詞における単一経路の制約に反する表現（「木から邪魔な枝を切る。」/「花から花びらをちぎる。」など）が成立する要因について、先行研究であげられている反例（The cook cracked the eggs into the glass. など）とまとめて考察を行い、統一的な原理でこれらの反例である現象を包括的に説明できる提案（状態変化を内在する移動事象表現）を行う。

参考文献

- Goldberg, Adele E. (1991) It Can't Go Down the Chimney Up: Paths and the English Resultative, *BLS* 17: 368-378, University of California, Berkeley.
- Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and Cognition*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantics Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 洪春子 (2020) 「日中韓の「切る・割る」事象における語彙カテゴリー化の対照研究」『言語研究』158: 63-89.
- 井本亮 (2016) 「「ケーキを大きく切った」をめぐって: 一体性変化の修飾」『商学論集』84(3): 17-35. 福島大学経済学会.
- 岩田彩志 (2010) 「Motionと状態変化」『レキシコンフォーラム』5 特集 移動と変化と経路: 27-52. ひつじ書房.
- 伊東朱美 (2015) 「日本語の移動変化動詞と場所格交替」『東京外国語大学留学生日本語研究センター論集』41: 95-105.
- 岩崎宏子 (1981) 「特集・類義語の意味論的研究—むしろ・ちぎる—」『日本語研究』4: 28-30.
- 川野靖子 (2021) 『壁塗り代換をはじめとする格体制の交替現象の研究』東京: ひつじ書房.
- 岸本秀樹 (2001) 『壁塗り構文』影山太郎 (編) 『日英対照 動詞の意味と構文』100-126. 東京: 大修館書店.
- 栗田奈美 (2018) 『視覚スキーマを用いた意味拡張動機づけの分析』横浜: 春風社.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 李響 (2016) 「離脱動詞と移動動詞の比較: 「とれる」「おちる」を中心に」『言語学論叢』35: 75-86.
- 李響 (2019) 「日中離脱を表す動詞の意味論的研究」筑波大学博士学位論文.
- 奥津敬一郎 (1981) 「移動変化動詞文—いわゆるspray paint hypallageについて—」『国語学』127: 21-33.
- 王鈺 (2021) 「中国人日本語学習者と日本語母語話者における多義動詞「切る」のカテゴリー構造比較—心理実験により意味分析の結果を検証する—」『テキストマイニングとデジタルヒューマニティズ2020』75-96.
- Yasuhara, Masaki (2013) A Modification of the Unique Path Constraint, *JELS* 30: 355-361, 日本英語学会.

ご清聴ありがとうございました。

